

1 悲鳴止まぬ湖

私がこれまで目にした中でもっとも悲しい場所は
あの旅籠^{はたご}の先の深くて小さな湖
南に向かう者がたどる山道を
登りきった先の湖

平らな尾根から窪んでいて 5
湖の深い縁^{ふち}からは何も見えない
打ちつける風が止むことなく
震える小波^{さざなみ}を凍えさせている

湖の三方は傾斜した土手が石組みされ 10
残る一方にはイグサが生えて
黄色に枯れたスゲ草が
湖を真^{ふち}っ直ぐ縁取っている

湖は四角く黒々として
静寂に包まれた屋時に湖面に映る空も暗く 15
頭上に見上げる時よりも
大地からもっと遠く離れているように見える

山の人々の言うには
真夜中 そこに行くと
死者の恐ろしい叫び声が聞こえるそうだ
それは突然の 大きく鋭い叫び声だとか 20

また ある者たちは見たという
静まり返った夜 くっきりと丸い月が見えるとき
まるで 中の悲鳴が破裂したように
湖面まで上がってきた泡^{あぶく}が弾ける^{はじ}という

話はその昔 不運なチャールズ王が 25
王冠を失い 斬首^{ざんしゅ}される前のこと
山頂^{はたご}に建つ旅籠を営んでいた

ある男にまつわる話である

男は 下層生まれで身持ちも悪く
無法時代の 恐れを知らぬならず者 30
ある日の夕方 男の旅籠はたごに
若くて 優男やさおとこ風の騎士が馬でやってきた

髪は巻き毛で 上質のリネンを纏まとい
柄つかに宝石をちりばめた 剣つるぎを差していた
馬での長旅に 35
その騎士は すっかり疲れ切った様子

一夜の宿を求めた騎士は
大袋を馬から下ろしたが
他人ひとには持たせず 自分で抱え
地面に下ろす時も 側から離さなかった 40

「中は 金貨か宝石に違いない
国王への献上金を南に運ぶところか」と思った主あるじは
忠義な臣下の口調でべらべら喋り
国王讃歌を口ずさみ始めた

客人もそのもてなしに段々と気を許し 45
ワインでの乾杯に応じた
しかし 食べ物はほとんど口にせず
主あるじの後ろから 部屋まで大袋を運んでいった

「それでは ごゆっくり」と主あるじは言ったが
言葉とは裏腹に 腹の内には悪意を秘めて 50
クロムウェル側について戦い倒れた息子のことを
一度たりとも忘れることはなかったのだ

たとえ主あるじよりもはるかに優しい心根の者であっても
貧しさに復讐心が輪をかけて罪を犯すということはよくある話
ましてや 主あるじは生まれつき粗暴で 55
悪事を働くことなど日常茶飯事

真夜中 足音を立てないように靴を脱ぎ
主あるじは こっそりと客人の部屋に忍び込んだ

ランタンと短剣を持ち
眠っている若者を刺したのである 60

刺した瞬間 悲鳴があがった
大きく 鋭く 恐ろしい悲鳴が
あるじ主は思わず枕で顔を抑えつけ
そのままじっと 完全に静まり返るまで覆い被さっていた

それから 息が無いことを確かめようと 65
あかり灯を顔に近づけた
すると何とした事か 残忍な心臓が止まらんばかり
殺したのは美しい女であった

日焼けした顔は化粧したもの
男の頭髪と見えた鬘かつらは外れ 70
突き刺した胸は女の柔肌
美しい女の死さまに様であった

半ばしまったと思いつつも
あるじ主は 自分の犯した罪で気を失うような柔やわではない
ベッドから例の大袋を引き摺り下ろし 75
略奪品の中身を調べた

ひも紐を切り 手を突っ込んで
人殺しした指で 中をまさぐるや
あるじ主の額に恐怖の生汗が吹き出して
訳わけもわからず動転した 80

指に触れたのは金ではなかった 冷たくもなく
硬くもなく 肉のような感触
巻き毛を掴んで引っぱり出したのは
殺されたばかりの若者の生首

それは 切り落とされた若者の首 85
さらにぞっとしたのは
先ほど殺した女と再会したかみまがと見紛うばかり
二人は瓜二つではないか

きょうだい兄妹さながらの二人を

一つこも菰ゆに結わえて 90
背中に担いで 階段を降り
そっとはたご旅籠から抜け出した

湖に向かう夜は暗く
静かで じめじめしていた
繋いだ小舟を岸辺に引き寄せる時 95
舟を打つさざなみ小波がくすくすと笑った

舟底に背負ったこも菰を降ろし
平らならに均して
周りを押さえるように
ごつごつした石を敷き詰めた 100

その上に さらに次から次へと
これ以上は小舟が保たないところまで石を積み
あともう一インチで沈むというところで
男は衣服を脱いで 小舟を岸から押し出した

暗闇の中を 真っ裸で 105
泳いで押していった
湖の真ん中まで来ると 舟の中に水を入れて
恐怖の積荷を沈め 視界から消し去った

泳いで岸に辿り着くと 衣服をまとい
血糊のついた指をごしごし洗った 110
それから うち家まで走って帰り 殺した女の馬に乗り
いずこ何処ともなく姿をくらました

しかし男は死ぬ前 ある仲間にこの話をした
誰にも知られていなかったこの話を
それで 男の唇から吐き出された罪が 115
犯されたこの地つに取り憑いたのである

(山中光義訳)